

小中学校校歌にみる近江の風景イメージ に関する研究

汐見 昌子*・笹谷 康之**

* 正会員 (株) エース (ACE Co.Ltd)

** 正会員 工博 立命館大学助教授 理工学部土木工学科 (Ritsumeikan University)

本研究は、地域の人々にとっての価値ある資源が織り込まれる定型的なテキストである校歌を用いて景観要素を抽出し、それらの地域性・社会的背景に伴う地域イメージの差を解明することにより、景観資源を生かした計画やまちづくりを行うための基礎的資料を得るものである。つまり、景観資源の時代性を明らかにし、さらにそのうちで普遍的である卓越した景観要素の領域性・抱かれる理想的イメージについて明らかにする。

Key Word : school song, history of landscape, territory, image

1. 研究の背景・目的と既往研究

校歌は、地域の人々にとっての価値ある資源が織り込まれる定型的なテキストである。今までにも校歌をテキストとしていくつかの既存研究がなされてきた。それらは、校歌歌詞より要素抽出を行い、歴史的な背景などを加味し景観構造の側面を出したもの¹⁾、謳われる場所やそのイメージを数量化三類²⁾やクラスター分析³⁾で類型化したもの、校歌を郷山の抽出するために用いたもの⁴⁾、校歌や他資料を用いて工業港湾の変遷景観について述べた研究⁵⁾がある。しかし、抽出要素の時代性を加味したものはなく、要素に対して、具体的な学校位置の分布領域を出したものはない。本研究は、既存研究と同様、地域のイメージ形成に関連する具体的な要素を抽出し、さらに、社会的背景と共に要素はどのように変化するか、また、特に抽出数が卓越する要素についてはどのような領域性が存在するか、つまり、①抽出要素の時代性②抽出数が卓越する要素の領域性③抽出数が卓越する要素に対して抱かれる普遍的なイメージを解明することを目的とする。

2. 研究の手法

対象地域として、日本一の湖である琵琶湖があり、豊かな自然景観・歴史的景観・近代的な構造物に恵

まれる湖国近江を選定した。

- ①滋賀県内の公立小・中学校校歌(各231校・99校)を用い、地物・景物などの景観要素の抽出を行う。
- ②校歌から抽出された要素の時代性と文献などによる社会的背景を照らし合わせ、考察を加える。
- ③主な卓越要素に関して、GISを用い各要素の認識される領域性を分析し、山岳についてはCGを用いて「捉えられ方」を分析する。
- ④卓越要素と共に謳われる添景を抽出する。
- ⑤卓越要素のイメージを形容詞から分析する。
- ⑥その他の近江に関連する写真・絵画・和歌・俳句・その他歌謡との比較を行い、校歌のテキストとしての特徴を示す。

3. 小中学校校歌にみる景観イメージ

(1) 景観要素の抽出

対象地域滋賀県全域の公立小学校231校、中学校99校について校歌の歌詞の収集を行った。なお、本研究での地域性の解析には向かないと判断した国立・私立の小・中学校6校、また休校している分校6校は除外した。

表1 抽出語の単純集計

	小学校	%	中学校	%
湖 (波などを含める)	77	33%	47	47%
山	83	36%	49	49%
(固有名称)	177	77%	89	90%
川	58	24%	35	35%
(固有名称)	107	46%	56	57%
池・泉・滝	34	14%	22	22%
谷	3	1%	2	2%
島	2	1%	4	4%
野・原	3	1%	2	2%
(固有名称)	38	16%	27	27%
丘	16	7%	11	11%
(固有名称)	22	10%	10	10%
緑・園	11	5%	5	5%
森	42	18%	29	29%
(固有名称)	9	4%	6	6%
土	8	4%	4	4%
大地	7	3%	5	5%
田	4	2%	3	3%
茶畑	20	9%	6	6%
道	2	1%		
坂	11	5%	6	6%
その他交通施設	1	0%		
建物・施設	3	1%		
神社	5	2%	1	1%
城	5	2%	4	4%
館・宮	9	4%	6	6%
その他史跡	4	2%		
雲・霧	3	1%	2	2%
植物	14	6%	16	16%
動物	90	39%	34	34%
行事	36	16%	14	14%
著名人など	3	1%	0	0%
伝統・歴史・文化	12	5%	7	7%
暮らし	66	29%	29	29%
気象	7	3%	6	6%
光	152	66%	73	74%
水	66	29%	24	24%
自然の恵み	30	13%	11	11%
	39	17%	14	14%

抽出された語の単純集計を行った内容を見ると、近江という土地柄、湖の抽出が多く見られる。また、山や河川といった比較的広範囲な自然地形の出現が際立つ。尚、小学校中学校は校区の広さが異なるため、別々に集計を行っている。また、以上の結果は、抽象的で対象物が限定できない単語はカウントに含めていない。

(2) 景観要素の時代性

a) 概略的な景観要素の時代性

時代による抽出語への影響を厳密に比較するならば、同地域に各年代の校歌が存在していることが望ましいが、学校の校歌は基本的に1校に1曲しか制定されない。そこで、抽出される語の厳密な比較ではなく、年代ごとにグループ分けした県全体のデータに対し、概略的に抽出要素の種類を比較した。尚、校歌制定年は各学校に問い合わせたものを使用しているが、不明であった学校においては学校創立年をそれに代用している。表2に各抽出項目で年代ごとの総数に対する抽出率を記す。「湖」「山」「川」は、時代によってほとんど抽出率が変わらず、高率で抽出される。これらは、この地域の普遍的なイメージ要素といえるだろう。また、時代変遷に伴い変化するもので、比較的特徴のある値が出てきたのは「田畑」で、昭和20年代・30年代の抽出率が高く、それ以降の時代ではほとんど抽出されない。工業化の影響から農業が衰退した歴史的背景とうまく合致するといえるだろう。次に、「水」は昭和40、50年代にほとんど抽出が少ない。昭和40年

代といえば、高度経済成長期にあたり工業化が進み、「水」が郷土のほりであるという認識には現れなくなっただろうか。また、昭和40年代後半から琵琶湖

表2 年代ごとの各項目の抽出率

年代(昭和)	20～29年	30～39年	40～49年	50～59年	60年～
年代別歌数	130	87	39	45	26
湖	40%	32%	36%	47%	35%
山	85%	76%	69%	62%	62%
川	45%	57%	46%	56%	38%
野・原	17%	21%	28%	2%	19%
森など	31%	21%	62%	58%	62%
田畑	8%	10%	5%	2%	4%
雪	12%	9%	13%	2%	0%
植物	36%	34%	41%	29%	42%
動物	15%	14%	18%	18%	15%
水	17%	15%	3%	4%	12%
恵み	13%	16%	21%	9%	15%
歴史	19%	31%	13%	24%	42%
文化	2%	2%	3%	7%	15%

総合計画また、それにたいする保全運動の高まりなどの時代背景より、昭和50年代・60年代以降では再び水に対して関心が強まったのではないだろうか。「野・原」では、昭和50年代の抽出が低い。昭和40年代頃高速道路などの交通施設の建設により、利便性が高まったことから湖南から湖東にかけての平野部では工場の進出が相次ぎ、工業化に進んだ時期である。昭和50年代には、野・原などの平野部が工場へと土地利用が変化した影響を受けていると思われる。「文化」といった語は年代が後になるほど多い。「道路などの交通施設」は抽出される絶対数が少ないが、中山道・近江路などの重要で歴史的にも有名なものの抽出の中に、昭和20年代には電車・湖上路、昭和40年代には新幹線・ハイウェイというその年代に新設された施設が抽出される。生活に関する語は、「くわ・産業・工業」などの語が昭和20年代に、「船」が昭和20年・40年代に抽出された。

b) 特徴的な抽出語

抽出数が少なくとも特徴的な語はある。ここでは、近江の歴史的事実と関連する特徴的な抽出語を取りあげる。「船」が抽出された年代は湖上交通のまだ盛んな時期と重なる。「電車」は、愛知川町では明治期より活発化した鉄道路線の整備の一つで明治33年近江鉄道開通の影響といえる。明治23年に完成された運河「琵琶湖疎水」は、昭和24年に抽出された。昭和20年代後半から40年代ごろに制定された校歌では、「工業」「工場」が抽出された。交通の利便性が高まったことから工場進出が相次ぎ、工業化が進展していった時期と重なる。犬上ダムは、昭和21年に完成した。昭和30年・昭和42年に甲良町で「ダム」が抽出され

ている。昭和39年に開通した東海道新幹線、昭和40年完成した名神高速道路も抽出された年代とほぼ重なる。表3に、校歌から抽出された概略的な抽出語の変化、特徴的な抽出語と作成年と実際の実景の変化との比較した表を記す。

表3 時代背景と抽出イメージの変遷

イメージの変遷			実景の変遷		
抽出語の変化	年	特徴的語	年	出来事	
田畑 水 森 野原 湖 川			1889	湖上汽船が通水	交通の便の向上 工業化
			1889	米原-敦賀間全通	
			1894	定期遊覧船が通航	
			1900	近江鉄道開通	
			1926	東山-三ノ宮間工務開通	
			1926	比叡山坂本ケーブル開通	
	1931	幾多の船	1927	陸上自衛隊完成	
	1935	電車	1930	大湖汽船株式会社(大湖汽船)を 近江舞子という名で開業	
	1945	船	1930	彦根公園水泳場開業	
	1947	産業	1934	琵琶湖ホテル開業	
山	1949	疎水	1954	琵琶湖内湖の干拓地決定	交通の便の向上 工業化
	1951	工業	1956	大上ダム完成	
	1954	かい田	1960	琵琶湖が国定公園指定	
	1955	大上ダム	1956	東海線米原-京都間電化	
	1957	工場	1957	大中の湖等の内湖干拓	
	1962	工場	1958	湖岸道路開通	
	1967	ダム	1958	比叡山ドライブウェイ開通	
	1967	新幹線	1964	東海線米原-津浦間開通	
	1968	船	1964	琵琶湖大橋竣工	
	1969	ハイウェイ	1964	名神高速道路米原内全面開通	
琵琶湖			1972	琵琶湖総合開発計画(特別措置法)制定	交通の便の向上 工業化
			1972	琵琶湖総合開発計画(特別措置法)制定	
			1979	琵琶湖米原養化防止条例成立	
			1986	風景条例制定	
			1986	国際琵琶湖環境委員会発足	
			1987	琵琶湖地蔵堂(計画)発表	

c) 現校歌と旧校歌の比較

旧校歌の収集できた学校が小・中学校併せて39校ある。これら旧校歌と現校歌については、抽出要素そのものを厳密に比較することができる。各校で、旧校歌と現校歌を比較し、変化した抽出語を取り上げ以下の表にまとめた。尚、表の「年」は現校歌の作成年代で、「出現」は旧校歌で抽出されない語が現校歌で抽出されたことを示し、「固有化」は旧校歌で普通名詞で抽出されていたものが現校歌で固有名詞で抽出されたことを指し、「消失」は旧校歌で抽出されたものが現校歌で抽出されなかったことを指し、「一般化」は旧校歌では固有名詞で抽出されたものが現校歌では普通名詞で抽出されたことを示し、「有名変化」は旧校歌では狭い視野で見られた峰で抽出されていたのが現校歌では山脈・山地として捉えられているものを指す。

「湖」に関しては、彦根・守山・大津で、昭和20年

代に謳われなくなる学校が4校もあった。昭和22年ごろから琵琶湖内湖が干拓されたためではないか。

「山」に関しては、昭和30年～50年、湖南・湖東地域において固有名詞で抽出されていたものが普通名詞に変化し、また、昭和50年前後に「峰」としてポイントで捉えられていたものが「山系」として捉えられる傾向がある。一方で、昭和30年代には、主に大津で、旧校歌では謳われていなかった山が出現した。

「川」では、湖東地方で30年代後半から50年代にかけて固有名詞で認識されていたものが一般名詞で抽出されたが、地域も時代も様々であるが抽出されなかった要素が新校歌で謳われるようになる傾向もある。

「交通施設」は特徴的で、電車・ハイウェイといったものが新設されると共に出現し、街道や舟といった衰退をたどった交通施設が消失するという構図がみえ

表4 現校歌と旧校歌の比較

湖					
出現要素	年	学校	市町村	モノ	消失・一般化
出現	10	愛知川	愛知川町	琵琶湖	消失
				消失	消失
				消失	消失
				消失	消失
				消失	消失
山					
出現要素	年	学校	市町村	モノ	消失・一般化
出現	38	晴嵐	大津市	比叡山	一般化
出現	36	石部	石部町	阿比山	一般化
出現	33	治田	栗東町	三上山	一般化
出現	31	多賀	多賀町	雲仙の峰	一般化
出現	30	瀬田	大津市	比良山	一般化
出現	24	石山	大津市	田上山	一般化
固有化	40	高島	高島町	山→武奈	消失
固有化	34	蒲生	蒲生町	鈴鹿→綿向	有名変化
				有名変化	有名変化
川					
出現要素	年	学校	市町村	モノ	消失・一般化
出現	48	安曇	安曇川町	安曇川	一般化
出現	36	石部	石部町	野洲川	一般化
出現	22	伊香立	大津市	真野川	一般化
固有化	38	晴嵐	大津市	川→瀬田川	消失
交通施設					
出現要素	年	学校	市町村	モノ	消失・一般化
出現	10	愛知川	愛知川町	電車	消失
出現	44	栗山	栗東町	ハイウェイ	消失
				消失	消失
				消失	消失
				消失	消失
田					
出現要素	年	学校	市町村	モノ	消失・一般化
出現	37	城北	彦根町	田園	消失
出現	27	玉津	守山市	田	消失
				消失	消失
				消失	消失
				消失	消失
				消失	消失
社寺・史跡					
出現要素	年	学校	市町村	モノ	消失・一般化
出現	38	晴嵐	大津市	石山寺	消失
出現	31	多賀	多賀町	社の社	消失
出現	22	旭森	彦根市	彦根城	消失
植物					
出現要素	年	学校	市町村	モノ	消失・一般化
出現	40	高島	高島町	ブナ	消失
出現	30	甲津畑	永源寺町	松・紅葉	消失
出現	25	七郷	高月町	松	消失
出現	24	石山	大津市	桜	消失
				消失	消失
				消失	消失
				消失	消失
				消失	消失
				消失	消失
動物					
出現要素	年	学校	市町村	モノ	消失・一般化
出現	44	愛東南	愛東南町	アユ	消失
出現	27	玉津	守山市	雲雀	消失
出現	24	石山	大津市	カイツブリ	消失

る。「田」では、20年代後半から30年代後半山・彦根で新しく出現しているが、これは内湖・湖岸の埋め立てによる農地の拡大によるものではないか。一方、主に栗東周辺で昭和30年代以降消失が相次いでいる。工業化による農業の衰退によるものと考えられる。「神社・史跡」では、石山寺が消失・出現のどちらにも現れるなど特徴が現れず、この資料においては言及できない。

「植物」では、松・紅葉が消失・出現のどちらにも現れるが、出現は昭和30年代頃までである。とくに昭和30年代後半から昭和40年代にかけて消失する場合は圧倒的に多い。

（3）卓越要素の地域性

a) 「湖」「山」「川」の領域性

ここでは、この地域で時代変遷に左右されず普遍的に認識される要素のうち、特に抽出数が卓越している三要素についてみていく。尚、一般名詞で抽出される語は領域や添景、イメージの抽出には適さないため、固有名詞で抽出されたもののみ扱う。「湖」「山」「川」について、各語が抽出される学校がどこに分布し、どのような領域性が存在するのかを検討した。

「湖」という語が抽出される領域は、ほぼ湖岸10km以内を中心に湖岸全域に分布している。しかし、距離は遠いが河川に近い地域でも、少数ではあるが抽出された。また、湖岸沿岸部であっても、守山・彦根・安曇川周辺で抽出されない学校が数校見られた。「山」では、「伊吹山系」「比良山系」「比叡山系」「鈴鹿山系」の領域は、ほぼ各山系の可視できる領域に可能な限り同心円状に広がる。しかし、ある一定の緩衝領域があるものの2山系に含まれる領域はそれほど無い。伊吹山系は県内有数の標高であるためか直径30kmの範囲にもおよび、湖対岸の学校にまで及ぶ。また、「三上山」に関しては、標高はそれほど高い山ではないがその美しい山容から直径10km圏内ではほぼ抽出される。「その他の山」として抽出されたものは、ほとんどが湖南から湖東地域にかけての低山と信楽山地である。各山系では、尾根沿いに連なる峰に近い場所でポイント的に「峰」として捉えている。その他のある程度はなれた地域からは「山」として比較的広視野で対象を捉えている。

「川」は支川を含めたほとんどの河川で抽出されたものの、「山」の抽出領域とは違い河川に沿った非常に近い5km以内の地域に限られる。これは、「河川」は「山」に比べ視認性が低く、遠方からは見えないことに起因するものであろう。

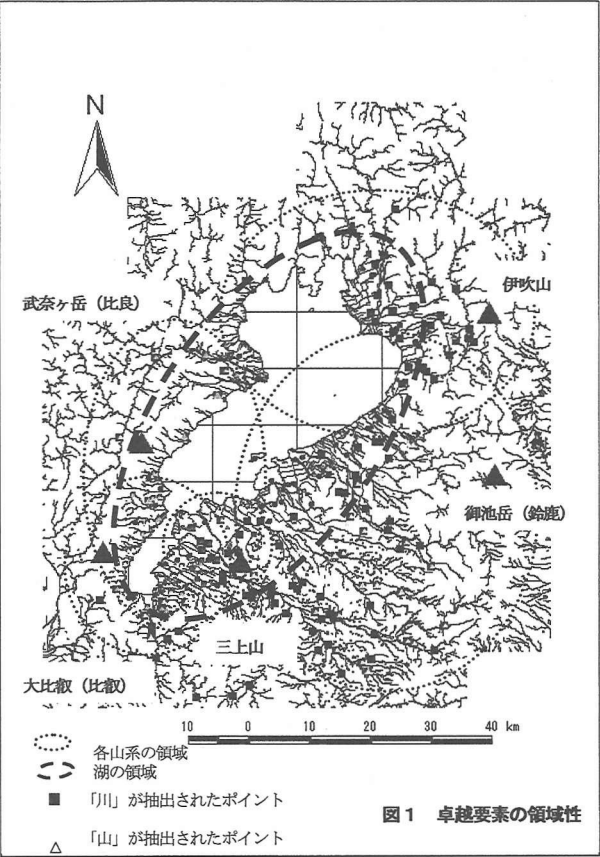


図1 卓越要素の領域性

b) 「湖」「山」「川」の添景

各要素は、単体で認識されるのではなく様々な要素とともに取り合わせて想起される。ここでは、各卓越要素に対し、どのようなものが添えられ謳われているかをみていく。表5に卓越した要素に添えて謳われる主な添景（全体の3%以上）を記す。

表5 卓越要素の主要な添景

添景				
湖	波	風	日・雲・空	
	日・空・雲・雪	緑	植物	動物
山	水	風	鮎	音

「湖」の添景としては上空のものが多い。抽出率は高くないが、白砂青松という言葉で思い浮かべられる松・真砂や、「におのうみ」という琵琶湖の呼称に用いられる鳩、また鮎、桜という語やかつての湖上交通の名残であろう船も出現した。

「山」の添景としては天候に関する語やみどりの抽出が多い。特に北部の地域で雪が抽出された。また、ひばり・雁などの鳥や紅葉・松・桜・杉といった樹木が

抽出された。ほかに、月を添景として抽出されることが他の要素より多く、**星座や近代交通施設**との景なども抽出された。

「川」の添景は、**水、音**という語の抽出数が最も多い。瀬田川・野洲川といった大河川では、**風**も比較的多く抽出される。また、固有名詞での**松・紅葉・桜**など様々な植物の出現が比較的多い。各河川で、**鮎**が抽出され、姉川では**稲**が抽出され、瀬田川では**ボートレースや蜆狩り**といった行事が抽出された。

c) 「湖」「山」「川」のイメージ

校歌では地域の理想的な像が切り取られる。よって、校歌で謳われる形容詞より、それぞれの要素の理想的なイメージが抽出できると考えられる。以下に、卓越要素に対し抱かれる形容詞を抽出した結果を示す。

表6 卓越要素の主要なイメージ

	イメージ			
湖	清い	明るい	広い	豊かな
山	仰ぐ	聳える		
川	清い	絶えず	豊かな	歴史ある

「湖」は、澄んだの湖、眼下に広がる広大な湖、豊かな富をもたらす湖のイメージ、明るいイメージなどが想起された。「山」は、高く聳え立った山の麓より仰ぐ景が想起される。また、戦いの場や城として歴史的出来事があった場という認識ももたれているのであろう。各山ごとに見ると、伊吹山は標高1377m県下最高峰であるためであらうか、**雄雄しい・霊峰・気高い**といった抽出が目立つ。比良山は、**遠く**といった形容詞が比較的多く遠くから見られている。比叡山では、**仰ぐ・聳え・雄雄しい**という語が多い。その他の山として扱った山は湖南から湖東の低山が多いためか、**もりあがった・かすんだ・たかくない・やさしい**などの形容詞が抽出された。平野部の中でこんもりとして目立つ身近で親しみやすいという認識が伺える。「川」は、清く、豊かな水量で恵みをもたらす河川という像が浮かび上がる。河川ごとに見ると、野洲川は、**清い**という形容詞の抽出も多く、他の川にはない**きらめく・さわやか・美しい**などの形容詞もみられる。玉川・祇王井川は**歴史ある**という認識がなされている。玉川は平安時代以来多くに歌に詠まれた。祇王井川は**岐王が掘らせた**と言われているからであろう。瀬田川は、抽出数の割に**清い**などの形容語が少ない。これは、瀬田川は琵琶湖から流出する唯一の河川であり、近代の治水事業として多くの手加えられているためであらうか。これらのイメージは、各資源に対する理想的な像である。校歌では、このような地域資源の理想的環境を守り育てるとともに、子供達に対して**重ねあわせ清く・**

たゆみなく・雄々しく・美しく・大きくなつてほしいという願いが込められている。

4. その他の資料との比較

校歌というテキストがどのような特徴を持つものなのかをみておく必要がある。ここでは、校歌と対象地域に関する他のテキストとを比較する。まず、「琵琶湖フォトコンテスト」6) との比較では、抽出された項目は校歌とさほど変わりはないが、イベントや新設の小規模施設が抽出される。しかし、校歌は長寿命のものが抽出される。次に「湖国を描く絵画展」7) と比較してみると、同様に抽出項目に差異は無い。抽出率に関しても、「湖」「山」が高いことも共通する。しかし、ここでは「集落」など一定の居住地域が取り上げられている。しかし、校歌は集落などのごく日常の景は単語として抽出されにくい。そのため、公共性のある語の抽出されるテキストだといえる。また、和歌8) とは時代が異なるものもあるが抽出される語はそれほど変わっていない。さらに、出現・消失地物もある程度にかよっており、その要因も同様であるが、和歌は個人的感情が大きく含まれるテキストである。最後に、歌であるが琵琶湖就航の歌9) では「湖・さざなみ・松・竹生島・古城・比良・伊吹」の語が謳われ、校歌の語で主だったものがちりばめられている。湖上からの眺めは、それ程近江の風景を特徴的に象徴しているのだろう。滋賀県民の歌10) では、「比良の峯・琵琶・機・稲・舟」など自然景と生活景の両方が謳われ、滋賀県全域イメージさせる語が抽出される。市町村歌は、校歌より少し広い範囲でつくられているため、概ね校歌の抽出語と重なるやや抽象的な地名が用いられる。これは、学区が市町村より狭いため地域を象徴させるイメージがより鮮明であるとかんがえられる。このように、校歌から抽出される語は、土木施設の特長11) (公共性・長寿命・大規模・基盤性) に合致するものが多い。

5. 結論

本研究は、謳われる地域イメージが土木施設の公共性・長寿命性・大規模性・基盤性と共通している小中学校の校歌を用い、以下の湖国近江の地域イメージを明らかにした。

①地域のイメージとして抽出される景観要素は、時代変遷・地域性に左右されるものと、普遍的なものがある。

②時代の変遷に伴い変化した要素は、ほぼインパクトの強い構造物等が多い。一方、それらの出現により消失する抽出語がある。具体的には、昭和40年代は工

業化により近代施設の出現が多く、50年代は工業化により失われた自然物の出現が減り、60年代以降になってまた自然景の出現が多い傾向がある。

③湖国近江で普遍的な要素で抽出数の卓越した要素は「湖」「山」「川」であり、それらには領域性が存在した。「湖」は、湖岸沿い10km全域とそれより遠い場所では河川沿岸部で抽出され、「山」は、県最高峰の伊吹山の直系30kmを除いては、直径10kmで抽出されるがその円が重なる場所では一方のみ謳われる場合が多い。また、山の近傍では「峰」とポイントで捉えられ、遠方からは「山」と広角で捉えられている。「川」は、視認性が山ほど高くないため、流域のみの抽出に限られ、「音」という聴覚での認知が高いのが特徴である。

④校歌はその地域の作成された時代にその地域の人々にとって「好ましい」像を謳う。したがって、そのイメージは、各資源あるいは地域の理想像である。卓越して抽出される要素の形容詞より抽出されたイメージは、清く・美しく・青い「湖」、仰ぐ・聳える・ゆるぎない・雄々しい・遠く・歴史ゆかしい「山」、清く・絶えず・豊かな・歴史ある「川」という、自然や歴史が豊かな環境が地域の誇る風景イメージが想起された。

6. 計画への展望

校歌で謳われる自然や歴史の豊かな風景像は地域の理想像であり、保全していく必要があり、基盤施設整備や環境計画ではイメージを崩さないようなゾーニングに配慮すべきである。「山」などは、その近隣のみならず遠方でも認識されており計画・整備にはそれらの場所でも検討が必要である。

また、昨今の市町村合併の際に、景観資源を融合のシンボルにできる可能性がある。例えば、地域区分を行う時、「琵琶湖」は県全域の融合させ、「山系」は領域により県域を5つに区分し、「川」は流域の結びつきを強める要素であり、融合のシンボルとして用いることができる。

【参考文献】

- 1) 北原理雄：校歌に謳われた都市の景観構造に関する研究-伊瀬平野の3都市を事例に、日本都市計画学会論文集(1990), pp673-678.
- 2) 石川貴士・ほか：小学校校歌にみる福岡の環境イメージ、環境システム研究(1993), pp257-263.
- 3) 矢部恒彦・北原理雄・徳山郁芳：小学校校歌に謳われた全国の地域景観イメージに関する研究、日本建築学会計画系論文集(1995), pp111-122.
- 4) 三ヶ尻裕司・仲間浩一：北九州市における街路から見た郷山の相貌に関する研究、日本都市計画学会(1996), pp607-612.
- 5) 岡田昌彰・仲間浩一・中村良夫：工業港湾に対する住民イメージの変遷に関する研究、環境システム研究(1995), pp32-39.
- 6) 滋賀県主催：「琵琶湖フォトコンテスト」(1992~1997)
- 7) 財団法人滋賀県文化振興事業団主催：「湖国を描く絵画展」(1999)
- 8) 山本健吉監修：「大歳時記」, 集英社(1989)・桂信子：「近畿ふるさと大歳時記」角川書店(1993)
- 9) 三高(現京都大学)ボート部応援歌：「琵琶湖就航の歌」(1918)
- 10) 「滋賀県民の歌」(1954) 県民公募で制定。
- 11) 篠原修：新体系土木工学59 土木景観計画, 土木学会(1982)

A Study on the Area Image Reflected in School songs in Oumi District

Masako SHIOMI*, Yasuyuki SASATANI**

This study aims to clarify the area image occurred to inhabitants. We analyzed the songs of 231 primary school and 99 lower secondary school to recognize conceptual figure of the area image. We look up Oumi district with lake BIWA as a case study. Some images are changed when times have changed, but the other images are not changed. For example, words written modern structures as image were increased in these songs. In Oumi district the most important image elements are "lake", "mountains" and "livers", and these elements have the effective range.